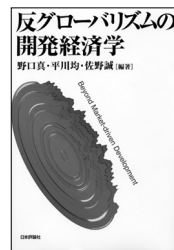


資料紹介



J・リンス, A・バレンズエラ編 (中道寿一訳) 『大統領制民主主義の失敗』 南窓社 2003年 220ページ

本書は、1994年にジョーンズ・ホプキンス大学から刊行された同じタイトルの2巻本中、第1巻に掲載された論文から理論に関するもの4本を選び訳出した翻訳書である。ただし4本の論文中、ページ数で7割近くを占めるのは第1章のファン・リンス論文であり、リンス論文の日本への紹介を主眼に編まれた本ともいえよう。ちなみに第2巻はラテンアメリカに関する事例研究から構成されている。

ファン・リンスは権威主義体制論で名高い政治学者で、ラテンアメリカの政治研究にも大きな影響を及ぼしてきた。本書は、比較政治学の新制度主義の立場、すなわち、民主主義は経済的・社会的条件のみならず政治制度の枠組みにも規定されているとの考え方に立って書かれた研究書である。ここでのリンスの検討課題は、大統領制と議院内閣制の相違点であり、どちらが安定した民主主義をもたらしやすいかという問題である。元首の選出方法、罷免の可能性、選挙民への説明責任、内閣の任命・罷免権、再選の可能性等々、さまざまな観点から大統領制と議院内閣制の特徴を比較検討し、本のタイトルからも想像されるように、リンスは議院内閣制に軍配をあげる。かいつまんでいえば、大統領制は硬直的であり体制の危機に陥りやすいというのがその理由である。

ラテンアメリカの大多数の国が大統領制を採用しており、ラテンアメリカ政治に関心をもつ者の必読書といえる。

(星野妙子)

野口真・平川均・佐野誠編著 『反グローバリズムの開発経済学』 日本評論社 2003年 266ページ

本書はタイトルが示すとおり、グローバリゼーション、新自由主義そして主流派経済学に対抗する日本、アジア、ラテンアメリカの経済学者が結集して、新たな開発戦略の可能性を模索する論文集である。序章において編者の一人である野口真は、グローバリゼーションの意味を再吟味し、それは国民国家の死滅や世界市場への一元化に収斂するものではなく、国境の意味の再定義を不断に迫り、空間経済の再編成に見合った制度的枠組みを国民国家に整えさせるものであるとしている。また、フェイ論文では代替的開発研究の方法論として、ラディカル派政治経済学を提唱している。そこでは、階級と国家の関係、それと蓄積システムとの関わり、経済システムと政治システムとの関係、米国のヘゲモニーとグローバリゼーションが開発に与える影響、などが課題として考えられている。個別論文では東アジア諸国の事例の他に、ラテンアメリカ関係ではアルゼンチンの経済危機、自由化政策をとったメキシコにおいて知的財産権制度が技術革新に対してマイナスの影響を与えたこと、不平等な所得分配をとったブラジルの経済発展と中国の「ブラジル化」への懸念などが扱われている。

(宇佐見耕一)

山本純一著『メキシコから世界が見える』 集英社
2003年 236ページ

本書は、グローバルな世界の真只中にあるメキシコの多様で生き生きとした像を、著者のメキシコに関する豊富な知識と経験に基づいて描き出そうとしたエッセイである。前半は、米国との国境の町々をバスで移動し、マキラと呼ばれる保税地区の工場を訪問して労使関係の調査をしたり、米国側に渡ろうとするメキシコ人に対応するメキシコの国境警備隊に同行したりするエピソード等が語られる。後半は、チアパス州のサパティスタスの村を訪ね、指導者の話を聞いたり、人々との交流を図ったりする様子が述べられる。

反ネオリベラリズムの立場にあることを明確にしながらも、同時に、著者がさまざまなオルターナティブに対しても、率直な疑問をぶつける場面が随所に見られる。強い主張や強引な事実整理の枠組みを排しており、その分、淡々として、個々の記述、エピソードが全体の中に拡散し、メッセージ性が薄れた印象を受けるが、それも著者の意図するところかもしれない。

(米村明夫)

浜忠雄著『カリブからの問い：ハイチ革命と近代世界』 岩波書店 2003年 viii + 239 + 15ページ

奴隷解放革命(1793年)と宗主国フランスからの独立(1804年)により、世界史上初の黒人共和国創設を果たしたハイチは、21世紀を迎えた今日なお政治的混乱と経済的困窮から脱せずにいる。本書はそのようなハイチが抱えてきた問題を、近代史理解という枠組みから解き明かそうとするものである。

その主たる問題意識は以下の4点にある。第一に、植民地支配と奴隷制によるプランテーション経済に組み込まれていた黒人奴隷たちが自らの解放と独立をいかに勝ち取ったのか。第二に、「人権宣言」の理念が掲げられたフランス革命の中でハイチ革命はいかなる位置づけをされていたか。第三に、ハイチにおける黒人共和国の創設はラテンアメリカ・カリブ諸国の国家形成にいかなる影響を与えたのか。最後に、史上初の黒人共和国が世界の最貧国となったのはいかなる事情によるのか。著者は以上の問題を近代史の流れを辿りながら丁寧に解き明かしてゆく。

なかでも「植民地の利益」と「革命の原則」の間で揺れ動くフランス革命政府とその後のナポレオン政権による狡猾な軍事介入、シモン・ボリーバルをはじめとするラテンアメリカ諸国独立の立役者たちが黒人の蜂起を警戒し、ハイチを排除していった史実など、近代世界の中でハイチが孤立化していった過程の説明が興味深い。さらに、植民地時代のプランテーション制によって構築されたモノカルチャー経済がハイチの低開発の根源的要因であるという指摘など、本書は今日のハイチ問題が近代史の負の遺産と密接な関係にあることを明らかにしている。

なお、同著者のハイチに関する類書に『ハイチ革命とフランス革命』(北海道大学 1998年)がある。

(村井友子)



ウーゴ・チャベス著（伊高浩昭翻訳・解説）『ベネズエラ革命——ウーゴ・チャベス大統領の戦い——』VIENT社 2003年 337ページ

本書はベネズエラのチャベス大統領の演説集の邦訳である。原書はキューバで出版されている。現在ベネズエラは政治社会が二極化し、対立がますます先鋭化している。大統領派、反大統領派の双方がそれぞれメディアを操作するため、両派から示される二つの「現実」は、まるで別の国を指しているかのごとく大きく異なる。したがって、チャベス大統領の演説のみからベネズエラの現実を判断することは到底できない。読者は、本書が描く像がベネズエラの二つの「現実」の片方であることを念頭におきながら読むべきである。こうした留保が必要とは言え、チャベス政権がどのような背景で何に怒りを感じて誕生したのか、どのような政治信条をもっているのか、彼のどのような政治信条や言動が反対派国民の怒りを買っているのか、ひいてはベネズエラの政治対立がなぜ混迷を続けるのかを理解するためには、本書が貴重かつ興味深い資料であることは疑いの余地がない。

もし本書でチャベス大統領が繰り返すように現在の政治的混迷がマスメディアを中心とする寡頭支配層による反乱、すなわち少数エリートらによる謀略であり、大多数のベネズエラ人がそれに抵抗してチャベスとともにボリバリアーナ革命の前進に邁進しているとすれば、彼にとって政治危機を打開する最良の方法は、不信任投票を実施して国民からの絶大なる信任投票を受け、現在の政治危機が少数派エリートらによる謀略であることを国内外に暴くことであろう。国民から厚い信任が寄せられたとなれば、これ以上の民主主義および彼自身の政権基盤の強化はない。にもかかわらず、参加型民主主義を標榜し国民投票を多用してきたチャベス大統領が、自らが新憲法に盛り込んだ不信任投票を避け続けるのはなぜか。このような彼の行動の意味を考察しつつ、本書を読み進めることをお勧めする。

（坂口安紀）



資料紹介

堀坂浩太郎編著『ブラジル新時代——変革の軌跡と労働者党政権——』勁草書房 2004年 240ページ

本書は、21世紀を迎えたブラジルが2003年のルーラ労働者党政権の登場により、今までとは異なる新たな時代を迎えたとの認識のもとに、その変化と今後の展望について考察を行なったものである。本書は10人のブラジル・ウォッチャーである研究者や実務者によって執筆され、政治、経済、社会などさまざまな視点から新時代のブラジルを九つの章に分け、その全貌の解明を試みている。また、序章とあとがきにおいて、編者が新時代の前と後のブラジルをルーラ政権登場との関連からまとめている。

本書では、ルーラ労働者党政権誕生の背景が明らかにされた後、グローバル化するブラジル経済、金融システムの安定化、産業と企業活動の変貌、中小企業と政府の振興策、都市システムと財政の地方分権化など主に経済から見た新時代のブラジルが提示される。その後、教育開発を通じたブラジル社会の変化が指摘され、最後の2章で外交戦略とメルコスルを核とした通商戦略という対外政策の変化に見る新時代のブラジルが展開される。

本書のタイトルであるブラジルの「新時代」は、サブタイトルにもある「労働者党政権の挑戦」によって特徴づけられるものであり、本書の表紙にもルーラ大統領の写真が掲げられている。しかし、全体的に本書では1990年代のブラジル、特にカルドゾ政権のブラジルに関する分析と考察が多くなっている。したがって、本書の内容自体から受ける印象としては、サブタイトルの前半部分である「変革の軌跡」の方が強い。しかし、「変革」を掲げるルーラ政権が発足して1年後に、変化の激しい近年のブラジルを日本において一冊の書にまとめた意義は非常に大きいといえる。

（近田亮平）



アルベルト・フジモリ著（岸田秀訳）『大統領への道—アルベルト・フジモリ回想録—』中央公論社 2003年 453ページ

元ペルー大統領アルベルト・フジモリによる回顧録。第1章「大統領になるまで」では、生い立ちから国立農科大学長を経て大統領になるまでが自伝的に描かれている。第2章「ペルーの経済再建」では、1980年代末の経済危機の時に前政権が残した負の遺産と、そこからの回復について簡単に述べられている。最も多くのページが割かれている第3章では、96年12月に起こった反政府組織トゥパック・アマル革命運動(MRTA)による「日本大使公邸占拠事件」において、大統領自身がどのように考えて行動したかが記されている。最後の第4章「日本での再出発」では、国内で大きな批判を浴びた三度目の大統領選への出馬とフジモリ政権崩壊の直接の原因となった汚職事件発覚をめぐって、自らが考えていた政権の将来構想と、内部の権力争いの様子が描かれている。

本書で興味深いのは、正義感、勤勉、自信、行動力など、フジモリを大統領に導いた要素をさまざまな逸話の中に読み取ることができることだ。これを通して彼の人となりの理解を深めることができることに本書の価値がある。また、三選後の政権構想は当時一般には明らかになっておらず、ペルーに関心のある人にとっては興味深い事実である。

本書で物足りないのは、在任中に大統領自らが憲法を停止し国会を閉鎖したいいわゆる自主クーデターについて全く触れていないことである。さらに同大統領は現在ペルー国内で人権侵害などの罪で問われているが、それについて本人の言葉で何の説明もなされていないことも残念である。

(清水達也)

『ラテンアメリカ・レポート』 バックナンバー

ホームページ掲載のお知らせ

『ラテンアメリカ・レポート』は、創刊より20年を経て、その時々の研究動向を知る上でも、また、歴史的な研究資料としての価値も増しております。

このような事情に鑑み、この度バックナンバーをホームページで公開することにいたしました。公開の方針としては、(1)出版後1年以上経過したもの、(2)当面は1995年以降、(3)執筆者から掲載の許可を得たもの、とします。

アドレスは、アジア経済研究所 (<http://www.ide.go.jp/>) の「出版」-「ラテンアメリカ・レポート」と辿ってお入りください。

皆様のご利用をお待ちしております。

(下の画像は、実際にホームページを開いたところです。)

